

*** 審査講評 ***

“定型”を捨てよう

国府正昭

このコンクールに対して今年も二百編近くの応募があったが、そのうちの七割以上が中学生の作品であったので、まず中学生の部の感想から述べたい。

今の忙しい教育現場の中で、学校全体あるいは学年全体で取り組んでいただいていると推測できる中学校が何校もあることは、本当にありがたいことだと思う。そういう学校での教育の一環という位置づけも考えた時、最後まで段落分けのない作品とか、行頭の一マスが空けてない作品など国語的にどうかと思われる作品は厳しく評価するべきだと考えた。この姿勢は二名の選者に共通している。来年度以降の応募に際してぜひとも参考としていただきたい。

内容に関しては、“読書感想文”が多いのはしかたないとしても、「私がこの本を選んだきっかけは……」「……に一番感動しました」「私はこの本から……を学びました」式の表現にたくさん出会った。まるで、時候の挨拶で始め、相手の安否を問い、「さて」で本題に入っていく手紙文のような“定型”通りの感想文が多い。おそらく、教室で取り組もうとする時、書きあぐねる生徒たちに対して、先生は「たとえば読んだきつかけから書いてみたら?」「どこに一番感動した?」「この本を読んでどう

だった?」などのアドバイスをされるのであろう。生徒たちは、それにそのまま答える形で書き始めるから“定型”が生まれる、そんな経緯ではないだろうか。しかし中学生の皆さん、皆が書いていることを読んでおもしろいと思いませんか?新しさやユニークさにこそ魅力があるのではありませんか?ここをぜひ意識して欲しい。最優秀賞とした田中まつりさんの作は大いに参考になると思う。誰もが知っている『シンデレラ』を取り上げながら、そのストーリーを追うのではなく、全体を独自の視座でとらえ直しシンデレラの美しい心こそが魔法だったのだという結論にもって行く思考の鮮やかさと確かさに大変感心をした。岡嶋美杜さん、サムワース・エリッサさん、青木美琴さんはいずれも本や読書を自らの生活と結びつけて述べているところを評価した。

小学生の部では、一冊の本から思考を広げ深めていく吉田菜月さんの真面目な姿勢がとても良かった。木村好花さんは異色のおもしろい素材を取り上げた。久留美諒真ちゃんと渋谷心愛さんの素直な読み方も素敵だった。

一般成人の部は、それぞれの作に深みや魅力があり甲乙つけがたいが、おそらく文章の細部にまで注意を払って書き上げたであろう

青木偉聖さんの作を最優秀とした。さらなる飛躍を期待したい。また、病を克服し今もなお読書に親しんでおられる廣瀬安司さんの姿勢には襟を正す思いがした。大野裕美さんの自分の中に分け入っていく態度、自分の考え方をとら

書き手を思い浮かべ

中山みどり

毎年、図書館のエッセイを読ませていただきながら、作品ばかりか書き手のことに思いをはせています。過去の応募者の作品のことも、応募を重ねているかのこと、印象に残っています。また、新しい書き手との出会いもうれしく思うことができる地域に根ざした図書館のエッセイはほんとうに楽しみです。

成人の部からお話しますと、最優秀になった青木さんは若い感性が光っていて、文字の中に「音」を獲得するという発想に驚き、感動しました。伸びて行く人だと直感しました。廣瀬さんとの再会がうれしかったですね。病を克服され、読書生活を充実されている様子に安堵するとともに、文章も一段と冴えていました。高校生が二人、成人の部で入賞したこともうれしいことでした。大野さん、「まるで約六十年前から私だけの為に送られてきたメッセージ」という表現に、あなたは光を見出しに違いありませんね。暁高校は毎年、力作を応募していた、だいていいますが、今年は近藤さんの素直さを評価しました。そのほか、成

え直していく近藤愛さんの態度、二人の高校生の本に臨む姿勢も好感の持てるものだった。他にも、奥村卓哉さん、高山多賀子さん、釘崎奈津子さん、堀田ちひろさんなど良い作品は多くあった。選べず、申し訳ないことであつた。

人では、清水愛さん、奥村卓哉さん、横山美菜さん、高山多賀子さん、奥田かなえさん、高校生の堀田ちひろさんの評点が高かったです。

さて小学生の部では、吉田さんがとてもよく書いていました。読書や学校の音楽会で練習を重ねている曲を通して生命の重さをあらためて確認し「戦争をなくすための道しるべ」を求める姿勢がきちんと書かれていました。木村さんはユニークで、ホームページを通して多くの読書仲間と出会います。驚きました。久留美さんの『先生、しゅくだいわすれました』は楽しいお話でした。いつの間にか物語のクラスに入り込んでいるところが面白かったです。渋谷さんの読書法の愉快なところは、その日の一番好きな場所で読むのだそうですね。階段とか、玄関の前とか、楽しげな姿が目につきます。後藤恋奈さんも入選ぎりぎりまでのところに来てました。次回を期待します。

中学生は数多くの応募がありました。最優秀に選んだのは楠中の田中さんでした。有名な物語のヒ

ロインのシンデレラに対する視点を、私はあなたに教えられたといってもよいでしょう。中部中の岡嶋さんは生後三か月のころから図書館に行つてたそうで、もちろん、その記憶はなくても、やがて「私の生活のどこかに、いつも図書館はあつたのだなあ」と気づくようになり、さらには図書館の効用にも思いを発展させていました。港中のサムワースさんは『ある犬のおはなし』という本を通して、犬の殺処分のことを真剣に考えるようになります。保健所に見学に行ったり、ボランティアの保護施設を訪問したり、募金をしたり、行動をすることがすばらしいと思いました。一冊の本があなたの人生に深い語りかけをしたのです。港中の青木さんは受験生になって本を読む機会が少なくなつた今、三年ぶりに再読した本から新しい発見をしました。読む年代や環境によつて、本は違った語りかけをしなくては私を私も経験しています。その他、港中の藤田結さん、山路凜さん、藤村勇人さん、楠中の立木海咲さん、森下陽斗さんは努力作でした。

成人の方は書くよるこびを持つておられると思いますが、小中学生の皆さんも進んで書いてください。

読書に関するエッセー 入賞作品集 二〇一七

平成二十九年十二月発行
発行 四日市市教育委員会
編集 四日市市立図書館